

万全の対策で開催 東京男声合唱フェスティバル

東京都合唱連盟は11月15日、現状考えられる限りの対策を講じて第20回東京男声合唱フェスティバルを開催しました。

フェスティバルの様子に参加した2名の方にお聞きました。



トンペイメモリアルズ20 なめき ゆういち 行木 友一

主に埼玉県で合唱活動をしている行木と申します。コロナ禍で開催された東京男フェスにトンペイメモリアルズ20で出演してまいりました。

この合唱団は東京男フェスが始まった2001年に、男フェスに参加するため東北大男声OBを中心に結成されたイベント団体で、団体名の末尾の数字は男フェスの出場回と同じ数字、つまり20回連続出場となります。私は第5回に浜離宮朝日ホール(以降同一会場)のトンペイ5で初参加以来、昨年以外の計15回目の出場となりました。

例年は30名強のメンバーが参加する中、今年は都連からステージに乗れる人数を最大27名に制限されたためもあり、新型コロナウイルス感染リスクを考慮して辞退する方が多く17名での参加となりました。

入口で検温、手指消毒ののち7分間のリハの後指定席に着席。出演者と他県連盟関係者のみが入場可という制限で開催されました。リハと本番以外ではマスク着用でしたが、我々はメンバーの総意でマスク着用でのオンステを決断しました。

更衣室がないので着替えはできません。男声合唱団だけなので着飾っている団体はありませんでしたね😊 トンペイは毎回「サラリーマン風」スーツ上下です。これからおかあさんコーラスが再開したら仮装集団みたいな感じになるのか、着替えができないとしたら少し心配になりました。

ステージ上では1から27までナンバリングされた立ち位置で歌い、客席に退場の際は再び手指消毒するという流れになりました。全18団体で前後半9団体にわけ、途中休憩が30分あり、さらにその間に換気休憩5分を設けるといった流れでした。

ちなみにマスク着用で歌ったのは我々を含め4団体のみで、14団体はマスクせずでした。あと特徴的だったのはステージ衣装で来場の義務付けという事で、コロナ禍ではこれが常

識になるのかな?と感じました。

恒例の公募演奏は今回はなし。最後に都連の清水敬一理事長のあいさつ「これからの2週間後までが男フェスだと思ってください。今後とも対策を万全にして、歯を食いしばって活動していきましょう!」という言葉に励まされ、出口の密を避けるため分散退場しお開きとなりました。

埼玉、神奈川、静岡県など各県連盟の理事も偵察に来ていて、今回のイベントがこれからのモデルケースになれば、と願っております。我々は今年2月1日に初の単独演奏会(川口リア)を開催して以来の演奏となり、ステージを堪能できました。都連の皆さまに感謝いたします。イベント終了後もれなく第3波が襲来しておりますので、皆さんも正しく恐れて活動してまいりましょう!

【行木 友一 Profile】

大東文化大学経済学部卒業。在学中大東大混声合唱団にてテノールパートリーダー、学生指揮者を務めた。合唱指導を清水敬一氏に師事。晋友会合唱団にて武満徹作曲「混声合唱のための(うた)」レコーディングメンバーに抜擢される。高校時代の恩師、大岩篤郎氏(元埼玉県合唱連盟副理事長)の呼びかけにより誕生した男声あんさんぶる「ポパイ」の創設に関わり、現在団内指揮者。男声合唱団コール・グランツ客演指揮者。他KB Singers'(トッテナー)、トンペイメモリアルズ(バリトン)にて活動中。

Ensemble Espoir Keishi KIMURA

私は、Ensemble Espoirという初出場の団体で歌いました。この団体は今年で3回目となる公募団体で、私は昨年のバトンタッチプロジェクトからの参加で今回は2回目のオンステでした。

今回は、コロナ禍での開催ということもあって、出場団体は18団体と少なく人数制限も27人とステージ上で距離が取れるように制限されていました。あと一番大きな違いは、一般の観衆は入れずに出場団体のみが客席で聴く、いわゆる合唱祭形式でした。なのでリハも事前に終了し前半ブロックスタート時には、全団体が個人指定席に着席する形でした。入退場も客席から直接行いました。

感染対策の方は、合唱連盟の指針に従い、ソーシャルディスタンス、マスク、消毒は徹底されていました。ただし、リハとステージ上でのマスク着用は無しでも距離が取れているのでOK、結果的に高齢者の多い団体ではマスク着用で歌っていました。私が参加した団体はマスク無しで演奏、ちょうど

昨年の男フェス以来のステージとなりました。

東京男フェスは例年50団体以上参加するのですが、今年は18団体と少なかったので集合が12時前、全部聴いて終了が15時半過ぎという短い時間でしたが演奏自体は、このコロナ禍で参加するくらいなので、かなりの熱の入った演奏になってましたね。youtubeとかにアップする団体も多いと思いますので、ぜひ聴いてみてください。私の団体もアップされればいろいろ載せますのでよろしくをお願いします。

—————【編集部よりひとこと】—————

Keishi KIMURAさんは、『おんがく広場』第6号(4月15日)に「全日本男フェス in 長野も中止！」を投稿されましたが、現在の目標として、合唱では「コンクール全国大会出場」、合唱以外では「日本全県を訪問する」を掲げており、今年はまだ歌えないので、旅行に力を入れておられます。

Kimuraさんは、11月23日Facebookに次のようなメッセージを投稿しています。

コロナとインフルエンザの同時流行が危惧されています。実は先に冬になる南半球のオーストラリアではインフルの流行は、全くなく全てコロナに置き換わった状況でした。さて、こここのところ冬になってコロナ陽性者が増えている状況においてインフルがどうなっているのか調べてみました。

11月9日から15日におけるインフルとコロナの発生状況は、以下のようです。

インフルエンザ	昨年	9,000人	今年	23人
新型コロナ	”	0人	”	10,000人

完全にコロナに置き換わった状態で今のところオーストラリアと同じ状況です。いままでやっている感染症対策(マスク、自粛等)でもインフルが抑えられているのであれば、この対策はインフルには有効であるがコロナには全く効果無いという仮説になります。

ただ、これの原因は、はっきりしていません。コロナの関係でインフルの検査をしていないのか？ 京大上久保先生のウイルス干渉(ある2種類のウイルスがあるとき、一方が拡大するともう一方は全く出てこない)なのか？

私の仕事は、建設コンサルタントで医療関係には全くの素人です。でも今までのファクト(事実)を見てみると、専門家(とくにテレビに出演して恐怖を煽る)の言うことは疑問だらけです。一例をあげると、春の段階で、「このまま行けば2週間後には東京はニューヨークになる」とかね。東京はニューヨークになりましたでしょうか？

皆さんは、テレビに惑わされることなく、的確に判断して合唱活動をしていくのか、自粛するのか考えてください。

音楽、芸術の力を示す

ウィーン・フィル ノブレスオブリージュの誇り

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団が、11月5日～14日、来日し、8回の公演を行いました。入国が特例で許可されたものの、当然のこととして団員の行動は厳しく制限されたツアーになったと、日経11月21日文化面で報じています。

演奏は通常通りの楽器配置で行われ、楽団員はステージに上がって席に着くまではマスクをしていたが、演奏時には弦楽器も含めて、全員がマスクを外して演奏。これは「ソーシャルディスタンスを取った演奏は、明らかにクオリティに影響」することから、「ウィーン・フィルの響きを守る義務、楽団創立以来の意思として、常に最高の音を届けなければならない」との趣旨によるものとのこと。

全席が販売され、ほぼ満員の状態、いつもと変わらない状況だったようです。観衆は「ブラボー」などを自粛し、ホールは各種感染防止対策を講じ、演奏会全体としては、コロナ以前と同じではないものの、演奏に関する限りは、コロナ以前と変わらないクオリティを維持できたとしています。

コロナ禍で国際的な往来が制限されるなか、特別措置をとった政府は「オーストリア政府からの強い要請、両国間の文化交流の重要性に鑑み、厳格・適切な防疫措置の確保を条件に入国を認め」ました。

チャーター機による来日、入国前の陰性証明取得、入国時の検査、貸し切りバス・新幹線号車貸し切り利用、ホテルはフロアを分離、専用食事会場の利用、ホテルとコンサートホール間の移動以外は外出禁止、毎日検温、コンサート時以外は常時マスク着用、接触確認アプリCOCOAのインストールなどを徹底しました。

楽団長ダニエル・フロシャウアー氏は「私たちにとり音楽や文化がどれほど大切か、皆さんと共有したい。未来に向け、文化的な生活を取り戻すためのビジョンを示すチャンスだ」とコメントしています。

指揮者ワレリー・ゲルギエフ氏も「強い意志と音楽を愛する心を持ち、この勇敢なアクションに臨んでいる。今年生じてしまった様々な問題よりも、音楽や芸術の力がいかに強いかということを示したい」と力説しています。

また、フロシャウアー氏は「世界中で音楽家が演奏できない状態が続くが、その方々のためにも代表してコンサートができた」と述べ、西洋音楽の誇りと伝統を担うウィーン・フィルは、今回の日本ツアーにノブレスオブリージュ(高貴なるものの義務)の気概をもって臨んだということでした。